

## 門脇重綾と和歌

On Kadowaki Shigeaya as a waka poet

渡邊 健\*\*

Ken Watanabe

### はじめに

境港市渡町出身の幕末の志士・門脇重綾の和歌について紹介する。重綾は渡町の日御崎神社の神官であり、国学と神道を修め、和歌にも秀でていた。『蠮園集』という歌集があるが、一般にはほとんど知られていない。近時私は、境港歴史楽会の方々が『蠮園集』を翻刻・出版する事業のお手伝いをする機会に恵まれた。今年は重綾生誕190年の記念すべき年でもあり、今回の研究報告では、彼の伝記と歌集『蠮園集』について紹介するとともに、その和歌の魅力の一端をお伝えしたい。

### 1. 門脇重綾について

門脇重綾は江戸時代末期の文政9年（1826）伯耆国会見郡渡村（現 鳥取県境港市渡町）に、日御崎神社神官門脇重郷の次男として生まれた。重綾は天保10年（1839）、14歳の時に隣村中野村の私塾・景山塾に入り、漢学を学んだ。また弘化元年（1844）、19歳で飯田秀雄に師事し、皇学と和歌を学び、同3年（1846）、21歳で紀州の加納諸平に国学と和歌を学んだ。



（図1 門脇重綾肖像画）

門脇重綾の名を一躍高めることになったのは、『名和氏紀事』の上梓にあるといわれている。重綾は、後醍醐天皇を隠岐より船上山に迎えて挙兵し、建武中興の礎を築いた郷土の忠臣・名和長年の事蹟が知られていないことを遺憾に思っていたが、長年の子孫が筑後柳川にいることを知り、万延元年（1860）これを訪ねた。ここで名和家伝来の古文書を見て書写し、また文久2年（1862）には、江戸に名和氏の支族増井氏を訪ねている。重綾は諸資料を吟味するとともに、このようにして調査した内容を『名和氏紀事』にまとめ、鳥取藩主池田慶徳に届けた。

この功績により、翌文久3年（1863）、藩校尚徳館国学教授を拝命し、元治元年（1864）には『伯耆志』編纂のため国会見・日野両郡の現地調査を行っている。同年5月、周旋方として京都藩邸詰を命じられ、慶応元年（1865）6月には記録方助役を兼ねた。慶応4年（1868）1月、藩命により西園寺公望山陰道鎮撫使一行御用掛を勤め、鳥取藩の立場を弁明し、また朝敵とみなされた松江藩の弁護にも奔走した。同年3月、朝命により徴士内国事務局権判事となり、閏4月議定官弁事に任じ、従五位下となる。

明治2年（1869）5月 弾正大忠に任じられるが、大村益次郎暗殺事件の犯人の処刑に異議を唱えて、翌3年3月に謹慎を命じられる。一時郷里にあったが、同年5月、神祇大佑に転じ、津和野藩出身の福羽美静らとともに新政府の神祇政策に邁進することとなる。明治4年（1871）8月、神祇少輔に任じられ、11月には明治天皇の大嘗会挙行に際し主基方として和歌を奉り、「岩間ゆく水の緑も長狭川いさよふ瀬々の末ふかむらむ」の歌を詠んだ。同年12月 正五位に叙せられ、明治5年（1872）4月には、神祇省を廃して置かれた教部省で教部大丞に転じるものの8月、病のため東京番町の自邸で没した（享年47歳）。明治11年（1878）4月、息子の重雄によって歌集『蠮園集』が発刊されている。

### 2. 門脇重綾の和歌について

#### （1）『蠮園集』について

今回の研究報告では、門脇家所蔵の『蠮園集』を見ることがかなわなかったため、米子八幡神社蔵本の書誌データを以下に掲げる。

\* 原稿受理 平成28年12月9日

\*\* 教養教育科



(図2 蠶園集表紙)

- ①表紙 原装 青色 縦26.6 cm×横18.5 cm 袋綴(四つ目綴)
- ②外題 原・題簽「蠶園集 全」
- ③前付
  - 1 見返「正五位門脇重綾著 蠶園集 全 門脇氏蔵板」
  - 2 遊紙 1丁
  - 3 題字 2丁半「雄渾典禮 明治十年冬日 熾仁題」
  - 4 序 1丁 「明治十年十二月 飯田年平」
- ④本文冒頭
 

蠶園遺稿

門脇重綾

春歌

元日の朝またきより雪いたく降ければ  
花とのみけさふる雪のまかはすは昨日を去歳とへた  
てましやは
- ⑤本文の構成
  - ・総紙数 49丁
  - ・柱題「蠶園遺稿」1～39丁  
「蠶園集拾遺」1丁
  - ・「故教部大丞正五位門脇君墓碑銘 正六位宮原積謹撰」2丁
  - ・跋「明治十年十一月於西京堺街寓居之寸碧窓下海于宮原積識 林英書」2丁
- ⑥後付 なし
- ⑦刊行・奥書
  - ・明治十一年四月出版
  - ・著者 故門脇重綾 出板人 門脇重雄
  - ・発行書肆 吉岡十次郎

③4の飯田年平による序文に記されているが、『蠶園集』は門脇重綾の没後に息子の重雄が編集・出版した他撰家

集であり、総歌数 222 首。部立は、春歌 59 首・夏歌 8 首・秋歌 20 首・冬歌 6 首・恋歌 7 首・雑歌 50 首・長歌（反歌を含む）67 首・拾遺歌 5 首（うち 1 首長歌）となっており、長歌が非常に多いのが特徴である。

## (2) 『蠶園集』の短歌の表現

今回の研究報告では、『蠶園集』の冒頭 10 首を対象に分析を加え、門脇重綾の短歌の表現の特徴について概要を述べた。以下、2 例ほど挙げて要点を説明したい。

元日の朝またきより雪いたく降ければ  
花とのみ今朝降る雪のまがはずは昨日を去歳とへ  
だてましやは (蠶園集・1)

(参考)

いかに寝ておくるあしたにいふことぞ昨日を去歳と  
今日を今年と (後拾遺集・春上・1・小大君)  
歳のうちに春は来にけりひととせを去歳とやいは  
む今年とやいはむ (古今集・春上・1・在原元方)  
いかで人なづけそめけむふる雪は花とのみこそ散  
りまがひけれ (貫之集・314)

歌の大意は、暦の上では新年になったとはいえ、花が散るように雪が降り乱れているのでなかったなら、昨日までで去年が過ぎ、今日から年が改まると、区別することができたであろうか、といった意味である。旧年中と変わらず雪が降っていても、立春を迎えた今日は、その雪があたかも春の花の散るごとく感じられる、と詠んでいる。

(参考) にも挙げたように、立春詠の典型である『後拾遺集』『古今集』の巻頭歌を踏まえ、そこに『貫之集』の措辞を流用して取り合わせたような歌である。歌の表現・発想ともに新味はないが、詞続きが巧みで手慣れた詠みぶりであり、重綾の古歌の知識や作歌の力量をうかがい知ることのできる一首である。

早春  
鶯のなかぬかぎりはあらじともうめさくまどをあ  
けて社見め (蠶園集・3)

(参考)

春来ぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ  
思ふ (古今集・春上・11・壬生忠岑)  
文机の塵はづかしくなりにけり梅咲く窓を過ぐる嵐に  
(柿園詠草・52・窓前梅)

歌の大意は、春が来たと言っても、鶯が鳴き始めない限りはそうではあるまいと、窓を開けて梅の咲いている庭を見て確かめてみよう、といった意味である。(参考)に挙げたように、上句に周知の『古今集』忠岑歌を大胆に踏まえ、ほとんど剽窃といってもかまわないような詠みぶりである。第四句に「うめさくまど」とある表現は、索引類に徴してみるかぎりでは、『柿園詠草』に用例が見られるだけであった。おそらく和歌の師・加納諸平の歌を想起し自歌に取り入れたのであろう。

重綾の歌風は、短歌は概ね掛詞・縁語などの技巧を凝らさず平明な詠みぶりであり、歌の発想や表現などは『古今集』をはじめとする古歌に学んでいる。歌語としては、『蝸園集』5歌「いやめづらしき」・6歌「夜ごもり」など、『万葉集』に用例の見られる語を摂取している場合も多く、加納諸平の柿園派が『万葉集』を尊重し実感実情に即しつつ、力強く清新な歌風を目指した態度と共通するものがある。

重綾の和歌の一大特徴をなす長歌については、今回ほとんど触れることができなかつたので、また別の機会に改めて取り上げることとしたい。\*\*\*

### (3) 『蝸園集』所収の和歌と地名

ここでは、『蝸園集』の和歌に見える地名について考察する。

平安時代以降の和歌においては、題によって歌が詠まれることが多く、特に地名(名所)を詠む場合は、その土地の特定の景物との結びつきが伝統的に固定化し、和歌の世界での観念に基づいて歌が詠じられることが一般的であった。

『蝸園集』にもそうした名所詠がないわけではなく、また詠史歌(歴史上の人物や事件を詠んだ歌)の地名は、ほとんどが史実の知識に基づいて詠まれている。しかしそれを除けば、重綾の和歌に詠まれたり、詞書に記された地名は、その多くが現地を実際に訪れた場所であり、以下に示すように、特に伯耆・出雲の地名が多い。(以下、『蝸園集』の歌番号と、その地名が和歌に詠まれている場合は「歌」、詞書に出て来る場合は「詞」で示した。括弧内には、その地名の現在の呼称を記した。)

- ・23 詞 枕木山
- ・36 歌・89 歌 大神、92 歌・205 歌 神山、205 歌 大神山(大山)
- ・40 詞 蛸島・166 歌 蛸島(大根島)
- ・49 歌 日の川(日野川)
- ・101 詞 琴引山

- ・160 詞 美穂の崎(美穂関か地藏崎)
- ・162 詞 雲見嶽 162 歌 杵築・さひめの山(三瓶山)
- ・166 歌 錦の海(中海)
- ・167 詞 会見郡車尾村・安養寺
- ・170 詞 方結浦(片江)
- ・171 詞 千酌浦 171・172 歌 千酌
- ・173 詞 多古窟
- ・174 詞 加賀潜門 174 歌 加賀のみ崎
- ・176 詞 出雲国意宇郡速玉神社 176 歌 熊野
- ・177 詞 名和村 177 歌 名和の浦
- ・177 歌・178 歌 み船の上(船上山)
- ・190 歌 鳥髪(船通山)
- ・202 詞 伯耆国長瀬村
- ・204 詞 米子・出雲の清水寺 204 歌 清水山
- ・206 詞 安養寺
- ・208 詞 会見郡

大山・中海・大根島など、渡村(現 境港市渡町)出身の門脇重綾にとっては馴染んでいたはずの景物もあるが、万延元年(1960)筑紫行き途次や、文久3年(1863)『伯耆史』編纂のため会見郡・日野郡を廻村調査した際に詠んだ歌々も『蝸園集』には少なからず収められており、非常に郷土色豊かな歌集であるといえる。

以下に、重綾が大根島と千酌浦(現 松江市美保関町)を詠んだ歌を掲げておく。

出雲国蛸島たこの牡丹見にもものしける時

飢宇おうの海の 錦の浦の たこ島の 磯のさきおち  
 ず 蟹あまの子が 八重ゆふ垣の こちごちに 咲  
 をゝれる 花にほひ めでのさかりと そほ船の  
 小船はるのひにのりて 春日の のどなる時に ゆくらゆ  
 くら 漕たもとほり 岸ながら 見らくはあかず  
 磯の上に おりゐ遊べば しら波に とぶや燕は  
 垣越の 花くひちらし 放れ磯に あそぶこてふ  
 は 波の穂の 夕日にみだれ 島見れば 島おも  
 しろし 磯見れば 磯なつかしみ 花妻に 一よ  
 はさけれ 解さけん 吾が紐のをの さゝらがた  
 錦の海は あやにうるはし

(蝸園集・166)

\*\*\* 「門脇重綾と和歌——その長歌の表現の特質——」  
 (『岡大文論稿』第45号 平成29年3月)に掲載予定



(図3 枕木山から見た中海と大根島)

千酌浦

千酌の海 澳津雲井は わたつみの かざしの花  
 と 朝はふる 波こそたてれ 夕はふる 風こそ  
 さわけ 風の共 たゞよふ波か 波の共 たゆた  
 ふ雲か 朝さらす をちに横ほり 夕さらす 沖  
 にかべる 眉引の 隠岐の島根は 風雲の と  
 ほきわたりを いかなりし 時にあれかも 潮気  
 のみ かをれる沖に 荒き風 いぶきまぐはし  
 天つ日を 隔ておきけん 常暗と くれにし空も  
 かへらへば かへりしものを 何しかも 荒磯の  
 上に 岩戸たて かくりましけん 遠津神 吾大  
 君を かしこみや むせびてあるらん 慨みや  
 みだれてあるらし 天雲の おくかもしらぬ 千  
 重の白波 此浦隠岐国に直に対へり

千酌の海磯こす波のあまたゝびみらくかなしきお  
 きのしま山 (蠮園集・171、172)



(図4 千酌浜)

3. 終わりに

以上、今回の「弓ヶ浜セミナー」においては、地元の境港市でもあまり知られていない門脇重綾の伝記とともに、その歌集『蠮園集』の書誌データを紹介した。また『蠮園集』の翻刻作業を進めている段階で見えてきた、重綾の短歌の表現の特徴や、詠まれた和歌の地名について考察した。

一方、今回の研究報告で、話題として触れながらも、詳しく論じることができなかつたこととして、重綾の和歌と人的ネットワークの問題がある。『蠮園集』にもその名に見える飯田年平、宮原積をはじめ、重綾と和歌事績の上でつながりのある人物は、和歌だけの交流ではなく、同じ神職であったり、政治的任務の上で共に活動したりするなど、二重三重の結びつきを有する場合が多い。今回、このことに言及しながらも、未だ調査が十分に及んでいなかったため、詳しく説明することができなかつた。この問題については、別の機会に改めて考察することとしたい。

なお、「弓ヶ浜セミナー」から約半年後に、『門脇重綾遺稿歌集『蠮園集』一翻刻一』（境港歴史楽会、平成28年11月）が刊行されたことを申し添えておく。

参考文献

- ・『鳥取藩史 第一巻』（鳥取県立鳥取図書館、昭和44年12月）
- ・『鳥取縣郷土史 全』（鳥取県、昭和48年8月）
- ・『因伯紀要』（鳥取県、明治40年5月。復刻版矢谷印刷所、昭和55年12月）
- ・『境港市史 上巻』（境港市、昭和61年3月）
- ・『因伯名勝和歌集』米子今井書店、昭和21年5月）
- ・森敬三氏『幕末歌壇の研究』（楽浪書院、昭和10年2月）
- ・福井久蔵氏『幕末の歌人』（昭和20年4月）
- 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、平成26年12月）
- ・山本嘉将氏『近世和歌史論』（文教図書出版、昭和38年11月、復刻版パルトス社、平成4年10月）
- ・『幕末維新大人名事典（上）（下）』（新人物往来社、平成22年5月）

追記

図1の門脇重綾肖像画は門脇家蔵、図2の蠮園集は米子八幡神社蔵。貴重な資料の掲載のご許可をいただいた門脇重仁氏、内藤和比古宮司に感謝申し上げます。